

photo by Michel Aguilera "MIEKO SEGAWA"

瀬川真澄氏寄贈

ギャラリーG  
被爆70年祈念  
特別Gセレクション

# 遺されたものたち



竹田信平「MEMORIA (L / メモリア(る))」

7.21 | 火 | -26 | 日 |

浅見俊哉「呼吸する影 — 被爆樹木のフォトグラム—」

7.28 | 火 | -8.2 | 日 |

ミッシェル・アギレラ「Vêtements d'Hiroshima」

8.4 | 火 | -9 | 日 |

岡部昌生「被爆樹に触れて」

8.25 | 火 | -30 | 日 |

gallery G

広島市中区上八丁堀4-1  
アーバンビュージェランドタワー公開空地内

tel: 082-211-3260

fax: 082-211-3261

www.gallery-g.jp



ギャラリーG  
被爆70年祈念特別Gセレクション

## 遺されたものたち

1945年、人類初の原子爆弾が広島に落とされてから70年がたちました。

この歳月のなかで多くのアーティストが広島を表現してきました。ギャラリーGは創設以来そんなアーティストをサポートしてきました。

70年目の今年、祈念するとともに、時間の経過のなかで忘れられようとするヒロシマを考える展覧会を開催します。

広島市内には原爆ドームをはじめ、8.6の記憶をモニュメントとしてのこした建物や被爆遺品のように、モノ自身が語り部としてヒロシマを後世へ伝える、「遺されたものたち」が数多く残っています。

そんな語り部の声をアーティストが作品に表すことで、私達の日常に新たな視点を与えてくれました。

今回企画に参加してくださる4名のアーティストも「遺されたものたち」と向き合う作品を通して、私達にこれからの広島を考えるパワーを与えてくれることでしょう。

今年、被爆70年目の広島で、彼らの作品を日常生活のなかで人々が観て考え感じて、広島を未来へ繋げていただきたいと願います。

- vol.1 『祈りつつ、思慮深く、遺されたものの声を聞く』  
映画「ひろしま 石内都・遺されたものたち」上映 リンダ・ホーグランド／石内都  
映像絵本「さがしています」上映 アーサー・ビナード／岡倉禎志  
3.14 | 土 | ー22 | 日 | 旧日本銀行広島支店
- vol.2 竹田信平「MEMORIA (L) / メモリア(る)」  
7.21 | 火 | ー26 | 日 | ギャラリーG  
メキシコ在住。在外被爆者へのインタビューを取り続けてきた。  
録音したインタビュー音声の声紋を用いた作品を展示
- vol.3 浅見俊哉「呼吸する影 —被爆樹木のフォトグラム—」  
7.28 | 火 | ー8.2 | 日 | ギャラリーG  
埼玉県在住。2012年から毎年広島にきて被爆樹と向き合ってきた。  
被爆樹の影を直接感光紙に焼き付けたフォトグラム作品を展示
- vol.4 ミッシェル・アギレラ「Vêtements d'Hiroshima」  
8.4 | 火 | ー9 | 日 | ギャラリーG  
フランス在住。被爆遺品をカロタイプという方法で撮影した写真作品を展示
- vol.5 岡部昌生「被爆樹に触れて」  
8.25 | 火 | ー30 | 日 | ギャラリーG  
北海道在住。1980年代後半から被爆建物や被爆石などヒロシマの痕跡をフロッターージュで表現してきた。  
被爆樹木のフロッターージュ作品を展示

### 関連イベント

オープニングレセプション 7.21 | 火 |、7.28 | 火 |、8.4 | 火 |、8.25 | 火 | 18:00ー

トークセッション.1 7.22 | 水 | 19:30ー21:30

東琢磨×范叔如×竹田信平〔予約不要・無料〕

トークセッション.2 7.26 | 日 | 17:00ー

竹田信平×アーサー・ビナード〔予約不要・無料〕

トークセッション.3 8.2 | 日 | 15:00ー17:00

浅見俊哉×竹田信平×岡村幸宣(原爆の図丸木美術館学芸員)

大澤加寿彦によるミニライブ有り〔予約不要・無料〕

浅見俊哉ワークショップ 8.1 | 土 | 14:00ー18:00

『影をつかまえる—被爆樹木のこもれびをTシャツに写して着るワークショップ—』

〔要予約〕詳しくは展覧会詳細ページをご覧ください

※最新情報はgallery Gのホームページ <http://gallery-g.jp> をご覧ください



# MEMORIA(L) メモリア(る)

2015.7.21|火|—26|日| 11:00—20:00(最終日は19:00まで)

竹田 信平 Shinpei Takeda

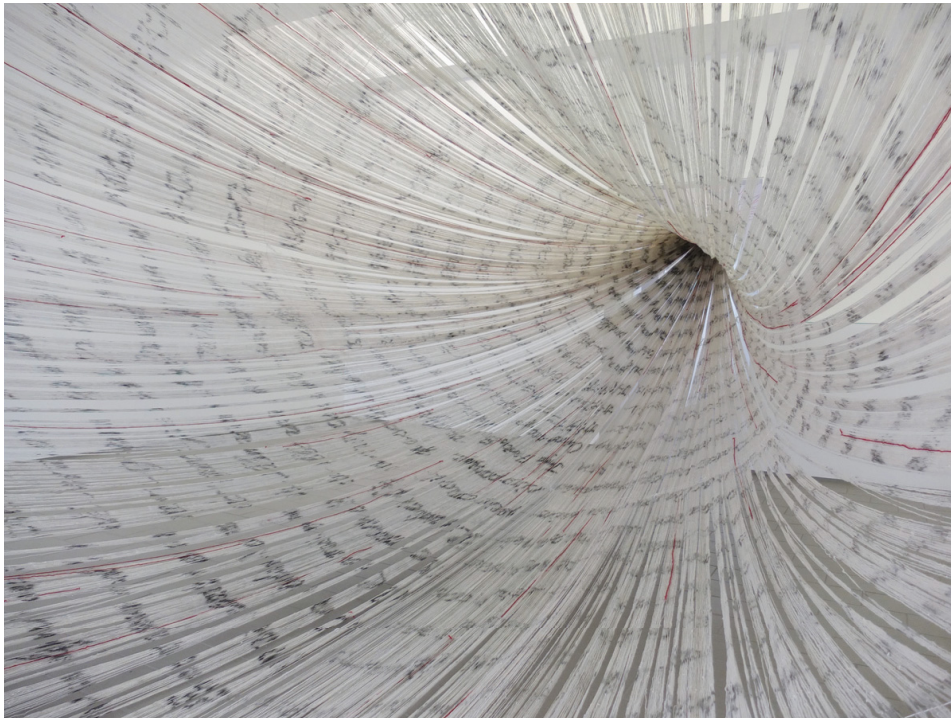


Photo by ROBIN MERKISCH / SPAM CONTEMPORARY

ベータ崩壊作品シリーズはアルファ崩壊に続く竹田信平のアートプロジェクトの一環。9年間にわたり北米・南米8カ国にて行った60人以上の被爆者のインタビューを元に、場所と時間を越えた記憶を追求、そしてどのように被爆者の声と向き合い、そして現在の自分とをどう繋げるかという作業を、インスタレーションを通して行ってきた。時間と場所によって打ち切られてしまったかのように見える記憶を再度”織り直す”という意味から、メキシコのオアハカ州テオティラン・デ・パエという先住民の織り物の町で製作。従来あるように、なにかを忘れないために建立される石碑のようなメモリアル(=モニュメント)ではなく、誰でもすぐに切れる繊細な糸を使い、その時と場所によりフォームが変わる空間彫刻を展示する。展示のタイトルはスペイン語のメモリア(個人のストーリー同時に集団の記憶という意味を持つ)という言葉を使い、それを現在進行形に行わなくてはいけないという動詞的提案を込めてメモリア(る)とした。



## プロフィール

1978年大阪生まれ 現在メキシコ・ティファナとドイツ・デュッセルドルフを拠点としてアーティストとして活動する。主にドキュメンタリー映画、写真、インスタレーション、ノイズ音楽、パブリックアート、コミュニティープロジェクト等を中心に媒体を越えて活動を展開。作品はサンディエゴ美術館(アメリカ)、ティファナ国立美術館(メキシコ)、CENART(メキシコ市)、TJ in China(北京)、サンパウロ移民博物館(ブラジル)、京都芸術センター、丸木美術館等で展示。2001年以来、難民や移民の子供に写真技術を教えるアート非営利団体THE AJA PROJECT(www.ajaproject.org)を創始、現在でもアートディレクターとしてパブリックアートを製作。2005年以来、北米・南米に渡った被爆者をインタビューし、アーカイブ化する企画、その一環として、国連軍縮局と共同制作したwww.hiroshima-nagasaki.comなどがある。2010年には米サンディエゴ市からのコミッションでパブリックアートを制作。近年の映像作品は“日本に最も近いメキシコ”(48分、2008年)、“ヒロシマナガサキダウンロード”(73分、2010年)。著書には“アルファ崩壊:原爆の記憶を現代美術はどう表現し得るか”(現代書館、2014年)、“海を越えたヒロシマ・ナガサキ”(ゆるり書房、2014年)などがある。2006年以来“GHOST MAGNET ROACH MOTEL”パンクパフォーマンス・ユニットを率いる。

## 2015年夏のスケジュール

- 5.17 竹田信平×岡村幸宣(丸木美術館学芸員)対談(長崎県立美術館)
- 7.10 記憶の消去(アルファ崩壊7)ティファナ国立美術館
- 7.18-9.27 “海を越えたヒロシマ・ナガサキ” 海外移住資料館(横浜)
- 7.21-26 個展「メモリア(る)」(ギャラリーG 広島)
- 7.25-9.13 広島・長崎 被爆70年「戦争と平和」展(広島県立美術館)
- 8.1-7 「ヒロシマナガサキダウンロード」再ロードショー(横川シネマ 広島)
- 8.1-9.13 広島・長崎 被爆70年 戦争と平和展 関連展覧会『竹田信平 アンチモニュメント』展(長崎県美術館)
- 8.13 “今福竜太と竹田信平とさぐるモニュメントからアンチモニュメントへのツアー”(長崎県立美術館)
- 9.20-10.25 広島・長崎 被爆70年「戦争と平和」展(長崎県美術館)

## 関連イベント

**オープニングレセプション** 7.21|火| 18:00-〔参加自由・無料〕

**トークセッション.1** 7.22|水| 19:30-21:30

東琢磨×范叔如×竹田信平〔予約不要・無料〕

**トークセッション.2** 7.26|日| 17:00-

竹田信平×アーサー・ビナード〔予約不要・無料〕

**トークセッション.3** 8.2|日| 15:00-17:00

浅見俊哉×竹田信平×岡村幸宣(原爆の図丸木美術館学芸員) 大澤加寿彦によるミニライブ有り〔予約不要・無料〕

## 「呼吸する影—被爆樹木のフォトグラム—」

## 浅見俊哉作品展

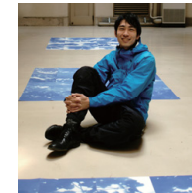
2015.7.28|火|—8.2|日| 11:00—20:00(最終日は17:00まで)

浅見俊哉 Shunya Asami



本展覧会は、ヒロシマにある「被爆樹木(Bombed tree)」を、太陽を光源として、直接、感光紙とデジタルセンサーに焼き付けたフォトグラム(カメラを使わずに撮った写真やその手法)の作品展です。被爆樹木とは、1945年8月6日8:15の原爆によって大きなダメージを受けた後も、再び芽吹き、現在も生きている樹木を指します。フォトグラムで被爆樹木を撮影しようと思ったのは、今生きている被爆樹木の「時間」をダイレクトに写し撮りたいと考えたためです。太陽を光源とし、感光紙やデジタルセンサーに直接焼き付けるフォトグラムの手法を用いる事で、1945年8月6日のあの瞬間から現在まで生きてきた樹木の「時間」を、掬い撮れるのではないかと考えました。私は、空に幹を高く伸ばし、枝に沢山の葉を茂らせ、四季の変化をみせる被爆樹木に大きな生命力を感じ、2012年から毎年広島に訪れ制作しています。2015年の今年は、戦後70年の節目の年です。私は、国内外様々な場所で作品をみてもらいたいと考え、「Breathing Shadow of Bombed Trees Exhibition Tour」と題し、作品展示キャラバンを行ってきました。3月:ヨコハマ創造都市センター(神奈川県)、4月:旧日本銀行広島支店地下ギャラリー(広島県)、5月:FULIGO(愛知県)、ヒルサイドフォーラム(東京都)、KAPL—コシガヤアートポイント・ラボ—(埼玉県)、6月:Galleria SanFrancesco(イタリア)、そして今回の展覧会がツアーの終点となります。展示作品は今年の4月に撮影した「春の時間」、7月に撮影する「夏の時間」の新作を含む約30点を出品します。作品を通して改めて「今」について感じ、考える時間となれば幸いです。

## プロフィール



写真作家・造形ワークショップデザイナー。1982年、東京都葛飾区生まれ。2004年より「時間」と「記憶」をテーマに写真作品を制作し始める。2006年、文教大学教育学部美術専修卒業。2008年、アートスペースKAPLを設立。2009年よりSMF(サイタマミュージックフォーラム)協力委員。2014年、衣裳家:田村香織とアーティストユニット「SeeSew」を結成。制作者から鑑賞者への一方向のアートではなく、作品を通して相互に関わりを持つ「場」や「時間」をつくりたいと活動する。2008年に「人・アート・地域の関わりを生み出すスペース」KAPL(コシガヤアートポイント・ラボ)を埼玉県越谷市に設立。代表を務め「アートでできること」を日々、模索する。写真作品制作の他に、美術教育の視点や方法論を応用した造形ワークショップ、アートプロジェクトなどのフィールドワークも活発に展開。感光紙を用いて、身近な影を探して写し取る「影をつかまえる」、全身の影を撮影する「MAN-PRINT」などの写真ワークショップ、写真の原理を体験できる「カメラに入ろう!」や水面の連続写真の上を歩いて作品を体感する鑑賞ワークショップなどを展開している。2014年から自費で写真集の制作もスタート。

【主な作品発表歴】○2015・「呼吸する影—被爆樹木のフォトグラム—」@旧日本銀行広島支店地下ギャラリー(広島・中区) ○2014・「呼吸する影-Shadow of Bombed Trees-」@新宿ニコンサロン(東京・新宿区)・大阪ニコンサロン(大阪・大阪市) ○2013・「かがわ山なみ芸術祭」@MonoHouse(香川・綾川町) ○2012・「彩の国ダンスセッション2012—コレオグラフィアの眼vol.9 光で紡ぐムーブメント」@さいたま芸術劇場(埼玉・さいたま市)・「Yokohama Dance Collection EX 2012 contemporary dance showcase」@横浜赤レンガ倉庫(神奈川・横浜)・「アートフェスティバルうらわ2012」@うらわPARCO(埼玉・さいたま市) ○2011・「International art exhibition "Values" in New York 2011」@A forest Gallery(NY・チェルシー) ○2010・「International art Exhibition enrapturing-journey in Barcelona SPAIN 2010」@CON Gallery(スペイン・バルセロナ) ○2009・「アメリカ・アレナスの対話型美術鑑賞ワークショップ」@芝の家(東京・港区) ○2008・「イオンActGreenArt」@イオンレイクタウンKAZE(埼玉・越谷市) ○2007・「Eternal Echo」@ A forest Gallery(NY・チェルシー) ○2006・「浅見俊哉作品展」@川越市立美術館(埼玉・川越市)・「Mite!おかやま」@岡山県立美術館(岡山・岡山市)

## 関連イベント

オープニングレセプション 7.28|火| 18:00—〔参加自由・無料〕

トークセッション 8.2|日| 15:00—17:00

浅見俊哉×竹田信平×岡村幸宣(原爆の因丸木美術館学芸員) 大澤加寿彦によるミニライブ有り〔予約不要・無料〕

ワークショップ『影をつかまえる—被爆樹木のこもれびをTシャツに写して着るワークショップ—』

8.1|土| 14:00—18:00

被爆樹木のこもれびの影をTシャツに写し撮り、着る事で被爆樹木の持つ時間を感じよう。感光性を持たせたTシャツに、被爆樹木のこもれびを写し、その影を柄にします。

○場所:ギャラリーG〜広島城にある被爆樹木ユウカリ・マルバヤナギ ○費用:ひとり3,500円 ○持ち物:古くなったTシャツ(色写りする可能性があるため、また肌が敏感な人のため) ○定員12名 ○対象:全年齢(小学生以下保護者同伴のこと) ○実施:SeeSew(シーソー)…浅見俊哉と田村香織のアーティストユニット。2014年結成。写真作家と衣裳家の視点による新しいプロダクトやワークショップを提案。主な活動に、四季の時間を感光させた布で着物をつくる「時間のきもの」プロジェクトを実施。 ○協力:KAPL(コシガヤアートポイント・ラボ)



## 「広島衣服 Vêtements d'Hiroshima」 (Hiroshima's clothing)

2015.8.4 | 火 | —9 | 日 | 11:00—20:00 (最終日は17:00まで)

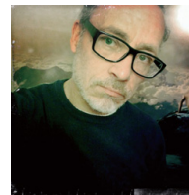
Michel Aguilera



瀬川美枝子 SEGAWA MIEKO 16 ans

広島女学院高等学校生徒の瀬川美枝子さんは、学校内で被爆した。縮景園に避難し、川に飛びこんで泳いで渡り、なんとか自宅に帰り着いた。その後弟の誠治さん(当時13歳)を家族とともに捜しまわり、見つけたが、誠治さんは8月11日に死亡した。美枝子さんは髪が抜けはじめ、入院したが、その後なんとか回復した。これは当日着ていたもの。瀬川真澄氏寄贈

Donation made by Masumi Segawa on September 27, 2001. Short-sleeved blouse of school uniform, exposed at 3 937, 01 ft from the hypocenter. (17, 3228 in x 28, 7402 in). Miko was a 16 year old high-school girl at the Girls Institute of Hiroshima. She managed to release herself from the ruins of the ploughed up building and ran away to the botanical park of Shukkeien (3 937, 01 feet from the hypocenter). She jumped in the river to reach her house swimming. The following day along with her family she went searching for Osamu, her 13 year old little brother. They found him but he succumbed to his injuries on August 11. Shortly after, Miko lost all of her hair and was hospitalized. Nonetheless, she survived the drama. This is the clothing she was wearing that day.



フランス在住の写真家、ミッシェル・アギレラによる、広島の被爆遺品を撮影した写真展。

私は1997年に、廃棄物処理上で捨てられた衣服をテーマにカロタイプという撮影方法を用いて、衣服をスタジオで撮影し、「屍衣」というタイトルの作品集を創り上げました。この一連の作品集を通して、私は過度な大量消費の、その先にある虚無の悲しみを彷彿させ、そしてその立証を目的としていました。捨てられた衣服から目を背けることが出来なくなったように、虚無の悲しみと不意の死が、私をこのテーマに惹き寄せていきました。

そんな私に日本を訪問する機会が訪れました。旅行の準備を進めていく中で、原爆によってもたらされた大虐殺の遺品が、広島平和記念資料館にて保存されていることを知りました。そして2005年の夏に、そこで初めて悲しみに包まれた思い出の品々を、目の当たりにすることになったのです。私はそれらの遺品を見ながら、それまで自分の創作活動の中心であった「屍衣」との繋がりを感じ始めていました。焼けて裂けられた布に刻まれた、痛みと苦しみを伝えるために、私は広島の被爆者が遺した、声なきメッセージを撮影する必要性に駆られました。被爆者の衣服は、まるで土深く埋まっていた化石のように、それを着ていた者の肌の奥に、押しとどめられた苦しみ、無力さ、恥辱などの感情を内包しているように見えました。

悲しい運命を辿った衣服を撮影しながら、あの日、空から降ってきた地獄を生き延びた人々の口から、原爆のもたらした辛く焼けるような思い出が語り継がれているように、私はこの記憶を感性に訴えながら、現実的問題として、意欲的に後世へ伝えるための橋渡しになろうと思いました。

It began in 1997 with the creation of a series of photographs entitled "Shrouds". This was based on the theme of abandoned clothes which I used to pick up from rubbish dumps, which I would then take photos of in the studio using the so-called calotype process. I intended at the time to showcase mass consumption in all its excesses through this series of images. Beyond this, I also wanted to evoke the tragedy of disappearance.

The tragedy of disappearance and brutal death implicit in this theme haunted me as the inevitable expression of abandoned clothing.

As I prepared the journey to Japan, I was about to discover the existence of relics from the nuclear holocaust: those sad mementos kept at the Peace Memorial Museum which we saw during our visit in 2005. A connection was developed with my "Shrouds". I felt the need to photograph these intimate symbols of Hiroshima victims' bodies. I wanted to communicate their suffering transposed in the marks on the fabrics.

The clothes belonging to victims of the explosion seemed to me to be like fossils we discover buried in the ground. They held the feelings of everything that was experienced in the flesh, in all its sorrow, helplessness and shame...

By taking photographs of these clothes of misfortune, I wanted to be a funnel of recollection. I wanted to be sensitive and present, like the survivors' voices still continuously narrating this burning memory of nuclear fire, this pre-planned moment of hell which fell from the heavens.

The snapshot was produced starting from a traditionally crafted wooden device, using the so-called calotype process. This photographic technique dates back to the beginnings of photography from around 1840. It is a method consisting of a direct print on photographic paper with exposure times lasting several seconds.

This distinctive system is comparable to a ritual (in its implementation) and foisted itself on me because of its slow pace, which inspires a certain respect and reverence. The rather unexpected change in photographic execution accentuates contrasts and transforms colours. It therefore inspired me to see the unforeseen effects of atomic radiation, revealing the very exposure to radiation felt by the victims.」

(Michel Aguilera/January 2008/ book "Vêtements de Hiroshima")

関連イベント

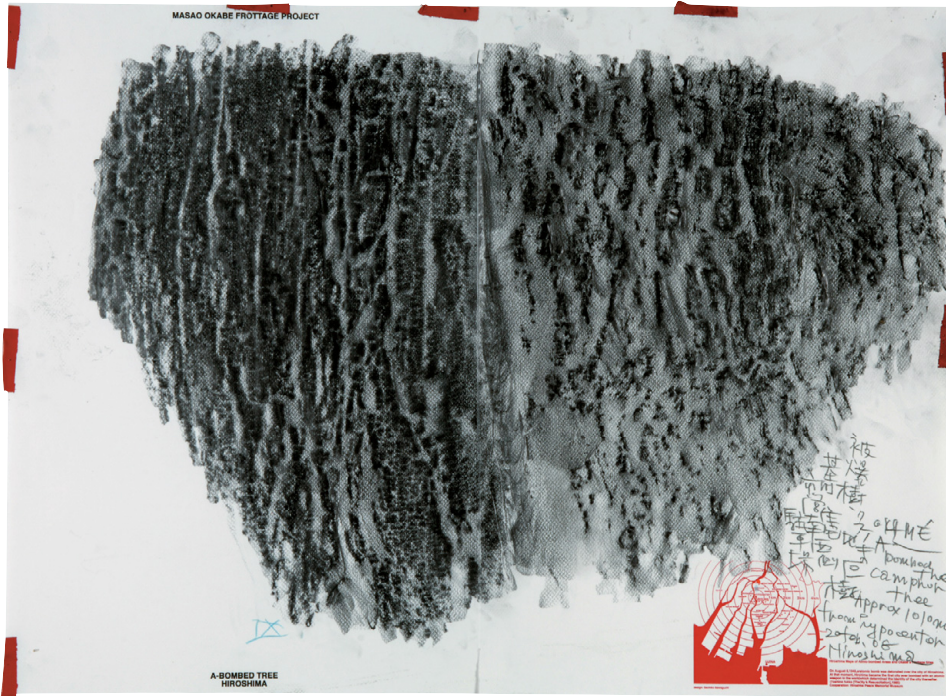
opening reception

8.4 | tue | 18:00—〔参加自由・無料〕

# 「被爆樹に触れて」 “Touching A-bombed Tree in Hiroshima”

2015.8.25 | 火 | —30 | 日 | 11:00—20:00 (最終日は17:00まで)

岡部 昌生 Masao Okabe



「被爆樹に触れて」鉛筆+紙 55×75cm クスノキ 基町市営住宅西側駐車場 2008年2月20日 同行:岡岡秀行 爆心地から1010m

そこから動くことの出来なかった樹木に、動くことのできる美術家が触れた生命の存在。土地の、場所に流れた時間に抱かれ、静かに向き合う時間を創りたいと思った。

2007年6月8日、陽の沈んだヴェネチアのジャルディーニ。第52回ヴェネチア・ビエンナーレ日本館は、宇島遺構から擦りとり採取した1500点のフロッターージュによる「ヒロシマの皮膚」に抱かれた被爆石が列をなして配置され、テンポラリーな歴史の現場となった。

漆黒の、闇のような静かな空間に、鉛筆が石を叩きつけるような擦過音が響く。ストロボが閃光のように、激しく左右に動く右手を射す。盲目の写真家ユジェン・バフチャルは、フロッターージュする音を聞きながら撮影をおこなった。

「ことばに表せない感動をえた。戦争は人を盲目にしたが、ヒロシマ以後あなたが制作することで、いったん盲目になった人に光を与える仕事が可能であることを示してくれた。ここまで来たかいたがあった」と、ユジェン・バフチャルさんはそう語り、被爆したイチヨウの樹膚を擦りとりをつよく私に促した。「声を発しない」生命。それに触れて応えたいと思った。



## プロフィール

フロッターージュによる表現を1977年よりはじめる  
1979年パリで169点の「都市の皮膚」を制作  
1980年代後半より広島の実験の痕跡を作品化する作業をはじめ  
1988年のヌーサ(オーストラリア)における市民とのコレボレーション以来、ワークショップを積極的に実施、国内外の各都市で制作・展覧会活動を展開している

- 1996 「ヒロシマ・メモワール」(広島市現代美術館)
- 2000 「光州ビエンナーレ」(光州 韓国)  
「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」(新潟)
- 2001 「ART for the SPIRIT 永遠へのまなざし」(北海道立近代美術館)
- 2002 「N'OUBLIEZ PAS 忘れない」(日仏会館)
- 2005 「シンクロシティ同時生起」(広島市現代美術館)
- 2007 第52回ヴェネチア・ビエンナーレ日本館(コミッション・港千尋)  
「STUDIO MONTPARNASSE」(リトグラフ作品集刊行 パリidem/item 2007)  
「岡部昌生 わたしたちの過去に、未来はあるのか」(港千尋編 東京大学出版会 2007)  
港千尋とのユニット「記憶を汲みあげる」(ローマ日本文化会館 2007)
- 2011 岡部昌生+港千尋「タスマニアのヒロシマ」MONAコレクション(ホバート タスマニア)  
岡部昌生+港千尋「事後のイメージ」(ペイルート・アートセンター)  
「きみは3.11を見たか?」(旧日本銀行広島支店)
- 2012 岡部昌生+港千尋「個園」(人可藝術中心 杭州 中国)  
「はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト」(福島県立博物館、南相馬市博物館)
- 2013 港千尋×岡部昌生「色は憶えている」(札幌、東京、広島)  
岡部昌生+港千尋「アート・アーチ・ヒロシマ」(広島県立美術館)  
「おらほの碑—南相馬の記憶と記録」(南相馬市博物館、福島県立博物館)
- 2014 「札幌国際芸術祭2014」(北海道立近代美術館)  
「そらち炭鉱の記憶アートプロジェクト」(旧住友炭鉱ホッパー遺構)
- 2015 「キオクとキロク」(福岡市立美術館)  
「被爆樹に触れて」(広島、東京、札幌)

## 関連イベント

オープニングレセプション&アーティストトーク 8.25 | 火 | 18:00— (参加自由・無料)

■展覧会「被爆樹に触れて」

2015.8.25—30 @gallery G(広島) / 10.24—11.21 @CAI02(札幌) / 11.30—12.5 @TOKI Art Space(東京)